まえがき

—なぜ、今、方言なのか—

昨年の 3 月 11 日に発生した大地震は、東日本に未曽有の被害をもたらした。たくさんの命が奪われ、生活の場が崩壊した。長年住み慣れた土地を離れざるを得ない人々も多く出た。しかし、まもなく一年になろうとする今、被災者たちは、ふるさとの復興に向けて立ち上がりつつある。まず何よりも人間の生存、すなわち、衣食住に関わることがらが重要な課題となっている。生活の糧を得るための産業の立て直しも急務である。医療や教育の問題も解決しなければいけない。

そうした、人間の生存に直接関わる課題に比べると、地域の文化に関する問題への取り組みは一見緊急度が低いように思われる。しかし、地域の復興は文化の復興とセットにならなければ成し得ないものであろう。なぜならば、人々の暮らしは、地域の文化のなかで営まれてきたものだからである。単に生存するということを超え、これまで通り人々がその地域に根をおろして生活していくためには、その土地土地の文化的な環境の支えがどうしても必要となる。

そのような意味で、地域の文化の保全・復興に関わる取り組みが進められているのは非常に重要なことである。それらの取り組みは、例えば、神社仏閣等の文化財や、古文書・古記録などの保存・修復の作業として行われている。あるいは、祭りや舞踊などの伝統行事・芸能も対象になっている。取り組みの対象は、ひとことで言えば、形のあるもの、目に見えるものであると言える。

それでは方言はどうだろうか。方言はいわゆる文化財や伝統芸能とは異なり、形のないもの、目に見えないものである。そのせいか、方言を文化として捉える姿勢は一般には弱い。また、方言が人間の生き死にに積極的に関わるものとは思えないというのが普通の理解であろう。確かに方言は、われわれにとってあまりにも日常的で当たり前の存在でありすぎた。しかし、今回のような大災害のなかに身を置くと、文化としての方言、さらには生存に関わる方言の意義が重く理解されてくる。

人間を人間たらしめている最たる要素は言葉であろう。その言葉がさまざまな文化の根底にあることは疑い得ないのではないか。そして、日本列島に豊かな文化の地域差が存在するとすれば、それをもたらす基盤に言葉の地域差、すなわち方言があることは間違いない。しかも、各地の方言は、一朝一夕にしてできあがったものではない。長い歴史のなかで、時間をかけて作り上げられてきたのが方言であり、そこには日本列島に展開したさまざまな文化の歴史が投影されている。その点では、方言はわれわれにとって、最も貴重な文化遺産であると言っても過言ではない。

言葉は人間と共にある。地域の言葉である方言は、地域の人々と共にある。社会の効率化、文化の画一化の流れのなかで、人々は方言にその土地らしさを求めるようになってきた。都会化の波が各地に及ぶなかで、ふるさとの温かみを方言に感じ取ろうとし始めている。方言は今や人々の地域的アイデンティティーの拠り所と言えるものなのである。これまで、当たり前の言葉であった方言が、現代においては、人間の生存を心理的に支える存在にまでなってきたのである。

以上、見てきたように、方言はわれわれの貴重な文化遺産であり、地域文化の象徴的存在である。また、そこに暮らす人々の精神的支柱でもある。今回の大震災は、そうした方言にどのような影響を与えるのだろうか。また、生きた言葉としての方言は、地域の復興にいかなる役割を果たし得るのだろうか。そして、この震災を機に、今後方言をどうしていくべきであろうか。そうした問いに答えることは、われわれ、方言に関心を持つ者にとって、今、ぜひとも取り組まなければならない課題であると考える。

さて、本書は文化庁の委託事業「東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する予備調査研究事業」の報告書である。全体は大きく2部からなっている。第Ⅰ部「東日本大震災の中の方言」は、震災と方言をめぐるさまざまな問題を概観し、具体的な取り組みに向けて第一歩を踏み出したことの報告である。また、第Ⅱ部「被災地方言の記録に向けて−三陸地方南部の方言調査報告−」は、今回の被災地であり、それゆえに、「危機的な状況が危惧される」宮城県気仙沼市方言、および、それを含む三陸地方南部地域の方言についての記録調査の報告となっている。

この報告書をまとめるにあたっては、被災地の方々や支援者の方々にたいへんお世話になった。第Ⅰ部の取り組みでは、気仙沼市において聞き取り調査を実施したが、市役所をはじめ、教育委員会、ボランティアセンター、避難所、仮設住宅などの方々にご協力いただいた。また、研究文献の調査では国立国語研究所図書館のお世話になり、河北新報社からも情報提供を受けた。震災の非常時の中にありながら、私どもの取り組みに理解を示してくださったみなさまに、心から感謝したい。また、第Ⅱ部の方言調査においては、気仙沼市、および、宮城県・岩手県にまたがる三陸地方南部地域の話者の方々のお世話になった。また、各地の教育委員会や博物館など、協力機関の方々に調査のためのさまざまな便宜を計らっていただいた。ふるさとの方言を記録として残すために、貴重な時間を割いて協力してくださったみなさまに、心よりお礼を申し上げたい。

この報告書が多くの方々の目にとまり、被災地の方言の将来について考えるひとつのきっかけとなることを期待する。

2012年3月8日

東北大学大学院文学研究科・
東北大学方言研究センター教授
小　林　　隆